2018年1月22日（月曜日）の神戸新聞に
パンの缶詰について紹介されました！

2018年（平成30年）1月22日　月曜日　神戸新聞（夕刊）

「阪神・淡路」教訓 食べやすい備蓄食

「パン缶」物語 児童書に

児童書のモデルとなった「パンの缶詰」開発者の秋元義彦さん＝東京都渋谷区、代官山蔦谷書店

阪神・淡路大震災を契機に備蓄食としてパンを缶詰にしたストーリーを描く児童書「世界を救うパンの缶詰」がこのほど、東京の出版社から刊行された。開発者で「パン・アキモト」（栃木県那須塩原市）の秋元義彦社長（64）が主人公。パンを軟らかいまま3年ほど保存できるようにする苦労や、当時抱いた思いなどがつづられている。（大盛周平）

大震災、届けた2千個の半数廃棄に…

秋元さんは阪神・淡路当時、被災地に牛乳パンを2千個提供した。しかし、保存がきかないため半分以上が廃棄されたという。被災地から「軟らかく保存のきくパンがあれば」との声を聞き、秋元さんは開発に着手。パン生地を缶に入れたまま加熱し、1996年秋に「パンの缶詰」を完成した。

以降、東日本大震災や熊本地震など国内の被災地に約15万個を提供。2009年からは3年の賞味期限のうち2年が過ぎた缶詰を下取りし、海外の食糧難に苦しむ地域に届ける「救缶鳥（きゅうかんちょう）プロジェクト」も始めた。

これまでに22万個以上を届けた同プロジェクトは昨年、環境と社会に貢献する活動をたたえる環境省「グッドライフアワード」で最優秀賞を受けた。

児童書は、子供向け書籍を扱う「ほるぷ出版」（東京都千代田区）が小学校高学年向けとして出版。神戸に住んだこともあるやましたこうへいさんが挿絵を、ライター菅聖子さんが文を担当した。

秋元さんがパンの劣化を防ぐ方法を見つけ出すまでの苦労、缶詰の回収を迫られる危機、パン店を創業した父との思い出などがつづられている。

秋元さんは「私が今まで経験したことのほとんどが書かれている。（支援をしたいと思ったとき）アクションを起こすきっかけになってくれれば、うれしい」と話した。

A5変形判、155ページ、1512円。ほるぷ出版☎03・6261・6691